

講演

参加型継承のための原爆体験・記憶分析

ルリ・ファン・デル・ドゥース

日本学術振興会外国人特別研究員

広島大学平和科学研究センター外国人客員研究員

おはようございます。ファン・デル・ドゥース・ルリです。「こんにちは」と言うべきでした。でも「おはよう！」で目が覚めたでしょう。ことばの力って不思議ですね。原爆体験をどう語り継ぐか、ことばの多様な力について考えながら、今日は、「参加型継承」というテーマで広島大学平和科学研究センターで立ち上げた研究計画をご紹介しますと思います。

大切な原爆体験を次の世代、もっと先の世代にどうやってつなげていけるか。どう記憶を継承していくのか。そのために、情報をどう集めるか。そしてそれをどう分析して、分かりやすいかたちにかみ砕いて、次の世代に託していけるか。そんなことをみなさんと一緒に考えたいと思います。

さて、研究について話す時、私たちはいろいろな専門用語を使います。でも、専門用語は、特定のグループの人だけにわかるものです。そのグループの人以外には、母国語でも意味がわかりにくいのが専門用語です。だから私も今日は、「難しい用語を使わない」よう自分に言い聞かせています。もし難しい言葉を使ったら手を挙げて、注意してください。

では、もう一度、簡単にごあいさつ。私は日本学術振興会の特別外国人研究員です。広島大学平和科学研究センターに外国人客員研究員として参りました。川野教授のご指導のもと、二年間の共同研究をします。学術振興会は、様々な学術的支援・貢献活動のなかで、海外と日本のいろいろな共同研究を支援し、成果を広く多くの人が共有できるよう貢献しています。私の研究の大きな目的は、戦争と原爆体験の記憶とは具体的に何か、何から構成されているのか、そして「あの日」と「その後」の記憶が、どんな状況の中で、いかにして、「ヒロシマ・ナガサキが象徴する恒久普遍の平和を希求する動き」に発展したのか、その道のりを調査・分析し、普遍的に理解できるよう体系化することです。体系化したものは、言葉や文化の違いを超えて、コミュニケーションを取るのに役立ちます。つまり私たちの研究は、誰でもどこでも、言葉や文化、社会、研究分野でも原爆体験の変遷を理解し、活用できるようにすること。大局と詳細がわかりやすいような情報提供のかたちをつくることです。



The Institute for Peace Studies
HIROSHIMA UNIVERSITY



日本学術振興会

はじめに ～ ご挨拶

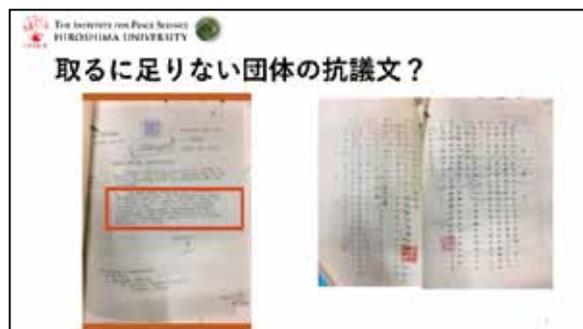
- ・広島大学平和科学研究センター川野徳幸教授（受入学術機関責任者）—日本学術振興会(Japan Society for the Promotion of Science)
- ・24ヶ月 ～2019年3月末日
- ・目的：国内外での学術進展
- ・研究：戦争記憶の参加型継承と普遍的共有-原爆体験の言説にみる視点と表象の変遷
- ・成果：ホスト機関、JSPSに報告。学会・学術誌で発表ほか、任意で公開。
- ・持続可能性：参加型継承へのビジョン

さて、コミュニケーションとはなんでしょう。コミュニケーションはアクションです。何かを伝え合うという動作です。コミュニケーションの中身は情報やメッセージで、言葉と知識を介して理解されます。メッセージとは、情報、文脈、解釈、意図などのまとまりです。そのまとまりの展開は、ディスコース、または日本語で「言説」と呼ばれています。この「言説」という専門用語を一つだけ、使わせてください。私たちの研究内容を言い換えると、「戦争の記憶、原爆体験」の「ディスコース（または言説）」を体系化するプロジェクトです。そして、その成果は学術振興会に報告し、ホスト機関の広島大学平和科学センターが管理します。

成果は学会・学術誌で公表しますが、任意で一般公開も考えています。持続可能な研究で広くみなさんに活用して頂ける形で成果を出していきたいものです。プライバシーの問題がない限り、皆さんにどんどん使っていただけるデータベースや枠組みを作りたいと考えています。それが、私たちの参加型継承へのビジョンです。詳しい説明に入る前に、継承の動機についてちょっと個人的な話をします。

広島大学に来る前、ある日、イギリスの公文書館で調べものをしてしていると、偶然こ

んな薄い紙切れが出てきました。それは抗議文でした。ご覧ください。



1957年、クリスマス諸島での水爆実験に対して、三重県の平和委員会の方が書いたものです。こんな薄い、今にも破れそうな一片が、何十年もイギリスの古文書館に保管されていたのです。何故これが？と不思議に思いました。その下に、この英語の書簡を見つけました。先の三重県平和委員会の手紙について、「これは取るに足りない一介の団体が普通の書式を使って書いてよこしたものだから、いつもの書式で返事をするだけで良い」と書いてあります。もう一通、この日本語の手紙を英訳する手続きの書簡も出てきました。「要約で十分である。詳しく翻訳する必要もない」と灰めかされていきました。

これを見た時、私はなぜか、胸が締め付けられるような思いがしました。1957年、日本は戦後でまだ海外と通信するのは珍しい時代でした。三重県平和委員会の方々は、どんな思いでこの抗議文を書いたのでしょうか。抗議文は丁寧に書いてあります。良い和紙を選び、大切に、丁寧な字で、心を込めて書いたことが伝わってきます。私は、この一通の手紙の意義を考えました。三重県の方々には英国政府から期待したような返

答がもらえなかったかもしれません。でも、諦めなかったのではないか。他にも似たような例がたくさんあったのかもしれない。もし、ここで、こういう平和活動が終わってしまっていたら、現在のような世界的な非核運動には発展しなかったのではないかと。取るに足らないとされた抗議文、無視された平和への願いが、他にもたくさんあったのでしょ。でも、多くの人たちが、同様に抗議文をたくさん、たくさん書いて各国に送り、いつかそれらが重なって、いろいろな国際機関の方々の耳に届いた。一般の方々、研究者やメディアや国際機関・団体の方々、おびたしい数の人々の思いが重なって、いつか、大きな非核運動にまで発展してきた。その歩みの重要性を感じました。この抗議文の展開は次の機会にお話しするとして、注目すべきポイントは、1957年の時点で三重県平和委員会の人たちと英国政府の関係者の間で共有されていなかった「平和への思い、願い」が、その後世界に広がった事実です。この経験から、「この心に響くもの」について知りたい、伝えたいと考えるようになりました。これも一つの継承の動機です。みなさんそれぞれに、いろんな動機があることと思います。「継承」は、伝達、相続、譲渡、受託、などいろいろな意味を含みます。送る側と受ける側の双方の視点を含むのが継承です。そこで次に、何を伝えるべきか。なぜ伝えたいのか。どうやって伝えればいいのか。そして誰にいつ伝えればいいのか。これらを考えていきたいと思ひます。

私は昔、原爆体験は8月6日、8月9日に集約されることだと思ひていました。で

も、川野先生が先ほど仰ったように、「あの日のこと」と「その後のこと」の両方、そしてそこから生まれた経験全てを含むのだと、ここに来て学びました。経験とは、あったこと、感じるもの、思いなどを含みません。私たちは生きていますから、この皮膚や目や耳や、感覚全てで覚えたもの、が全て経験です。原爆体験もそうです。あの日とその後、被爆者らが生きてきたこと、そこから子どもに伝え、孫に伝えたい全てのことが、原爆体験を構成しています。

では、その体験をどうやって伝えるのでしょうか。思いや願いは大事です。人間ですから感じます。この感じるものを誰かに伝えたい。しかし、思いや願いほど伝えるのが難しいものはありません。言葉が違う、文化が違う、これまで経験してきたものが違ふと、人の思いについて見たり聞いたりしたからとって、それが必ずしも自分の感覚にぴったり当てはまるわけではありません。感性は、その人のそれまでの生き方と経験が作るものです。だから、自分の人生経験につながらないものに対して、私たちはあまり感動を受けません。他人の経験は、自分のところで感じにくいし、自分の言葉で表しにくいのです。多様な、たくさんの被爆者たちの原爆体験を、あなたやわ

たしが、たった一人で理解しよう、継承しよう、と抱え込むのは無理です。

そこで、皆が参加して、原爆体験の理解や継承を手分けして行うのはどうでしょう。私は参加型継承をこう考えています。原爆の実体験のあった人、記録する人、保存する人、管理する人、展示する人、伝える人、教える人、調査研究をする人も、考察する人も、知りたい人も、みんなが集まったコミュニティです。コミュニティの中で、互いに役割を持ち、補完しあいます。では、どうやってそんなコミュニティをつくれればいいのでしょうか。文化や世代、言葉も違う人たちがどうすれば、原爆体験のコミュニティを共有できるのでしょうか。

ちょっとここで質問です。「あの日」とは何日ですか。

会場「8月6日！」

そう、8月6日ですね。もう一つあります。

会場「8月9日！」

そう、9日ですね。

では「その後」とは、いつの後ですか。

会場「原爆後？」「8月6日からあと」

「あの日からのこと」

そうですね。「その後」には、今も入っていますよね。

実は、みなさんが今、正しく答えてくださったのは、すごいことなんです。「あの日」と「その後」というのを、他の場所で聞いたら、例えば東京の渋谷で誰かに聞いたら、全然違う答えが返ってきます。「あの日」の「あの」、「その後」の「その」、これらの言葉は言語学でダイクシスというものなんです。指差して示す」という意味です。指差して示したものが何であるかは、ある

「場・空間」を共有している人たちだけにはわかるものです。「あの」「その」が何を表しているのか、みなさんと私にわかるのは、理解を共有できるのは、私たちが既にその理解の「場」を共有していることです。特定のことばのコミュニティの一員になっているということです。私たちの間で通じる暗号のようなものです。「あの」と「その」が「原爆」に関わることという「大切な視点」を共有する言説のコミュニティの、私たちは一員なのです。

では、その言説のコミュニティはどうやって形成されるのでしょうか。ここでもう一度、先ほどの古文書、三重県の抗議文を思い出ししながら、次のスライドを見てください。7月12日放送、NHK『クローズアップ現代+』の国連事務次長の中満泉さんのインタビュー場面です。「被爆者の思いをどう受け止めますか。今、非核について国連などでも非常に難しい状況です。どう思われますか」という問いに、中満さんは、こう仰いました。「被爆者たちが、口にするのもおぞましいようなご自分の体験を語ってこられたことが非核運動を支えてきた」。



つまり、皆さん一人一人が、長い年月をかけて、取るに足りない団体と言われながらも、力を合わせてやってきたものが、例えば国連まで届いた。また、オバマ大統領

憶から学べるものが、将来の復興・和解・平和の鍵、になるかもしれない。だから、原爆体験を語る時、「あの日」に続いて「その後」が大事なのです。これが「何を」継承するか、の答えではないでしょうか。



原爆体験の継承
～研究機関はどう貢献できるか

- ・ 「原爆体験」の歩みは、戦争記憶を「悲しみ、痛み、怒り、憎しみ」から「世界の恒久的平和の希求」へと昇華させた、世界でも類を見ない非常に貴重な例。
- 普遍性。平和への鍵? に注目。
- 「あの日」に続き「その後」の展開も継承したい。

次に「なぜ」継承するかについて。それは、平和の鍵を、次に渡さなければ、伝えなければ、忘れてしまうから。同じ「あやまち」を繰り返すかもしれないから。今でさえ、原爆を含む戦争の記憶に、社会的、政治的にも、人々の間で様々な食い違いがあり、それが時には、さらなる紛争を生んでいます。共有する記憶を失えば、解釈の闘いが生まれます。だからこそ、まず、原爆体験を戦争記憶の、歴史の認識の論争の枠組みで考えます。そこにどんな意見の食い違いがあるかについて明らかにします。それは単に人と人の間の記憶の違いだけでなく、時や場所、文脈によって個人の人生の中でも変わっていく記憶かもしれません。原爆体験と被爆者の方々のアイデンティティが、世論でも、メディアでも、ご自分の中でも、時を経て変わってきたかもしれません。そんな記憶の変遷が、社会を動かしてきたのです。つまり被爆者の方々が、弱者、犠牲者から平和運動を牽引する力になっていったこと。平和運動の象徴にまで

なったこと。そしてそれらの過程が原爆体験の「その後」です。これらを体系化して原爆体験のあゆみを説明するのも、継承の一つの方法でしょう。体系化したものは、いろいろな言語に訳しやすくなり、より広く将来の継承に役立ちます。そのためのデータや手法は何を使うか、後で少しお話ししたいと思います。最後に、誰に、いつ、どこで原爆体験を継承していくことができるか。皆さんからもご意見をいただきながら考察したいと思います。



流れ

- 1 なぜ—戦争記憶の論争—“史実”認識の論争について
- 2 何を—変遷する原爆体験と被爆者のアイデンティティ
 - ・ 弱者・犠牲者から平和運動の牽引者・象徴へ。
- 3 どうやって—体系化で直面する課題
 - ・ 社会的、時間的、個人的、方法的、実際の課題など。
- 4 データと手法
 - ・ 統計的、言語的、社会歴史的、個人的考慮など。
- 5 誰に、何時、何所で—参加型継承への持続可能な貢献に向けた研究計画

さて、戦争の記憶については、いろいろな考え方があります。いろんな見解があります。なぜでしょうか。皆さんの中で、被爆者の方のお話を聞いたけれども、何かもう一つ、分かりたいのに分からない、ぴんとこないと思った、でも、そう人に言えない、恥ずかしい、私は冷たいのだろうか、と思った人はいませんか。逆に、被爆者の方で、この気持ちを目の前の若い人、例えば12歳の小学生に伝えたいのに言葉が出てこない、この人にわかりやすく伝えられない、私が駄目なのだろうかと思った人はいませんか。私もそんな歯痒い経験がしばしばあります。でも、よく考えると、私たちが使う言葉の機能や構造自体にも問題があるんです。私たちは言葉に縛られています。

言葉というのは、自分本位の視点の枠組みになっているからです。例えば、「私」があって、私の前に「これ」があって、「それ」があって、「あれ」がある。私から見て、「ここ」があって、「そこ」があって、「あそこ」があります。英語なら、「here」「there」「over there」というふうに。こんな自己本位の枠組みに縛られながら、私たちは一生懸命コミュニケーションをとろうとしているのです。自己本位な言葉の視点の枠組みに加えて、歴史、社会、政治、文化的な枠組みも私たちの視点に境界をつくりまします。

ランクの日記」、そして日本の、「慶長遣欧使節関係資料」などがあります。

The Institute for Peace Science
HIROSHIMA UNIVERSITY

世界の記憶継承の取り組み (認識・保存)

- ユネスコ世界記憶遺産
世界の貴重な歴史的な文書、絵画、音楽、映画などの記録遺産を保存・活用・保護し、その活動を促進。記憶遺産への認識向上、広範囲の人のよる記憶遺産の活用を奨励。

例：英「マグナ・カルタ」、仏「人権宣言」、オランダ「アンネ・フランクの日記」、中「清代歴史文書」、韓「朝鮮王朝実録」、日「慶長遣欧使節関係資料」。

ユネスコ世界記憶遺産は、「命や人権に関わる文書を記憶としてとどめていくことには、戦争を抑止する力がある」と考えています。

The Institute for Peace Science
HIROSHIMA UNIVERSITY

1. 戦争記憶、“史実”認識の論争について

理解は自己本位の視点から始まる。

戦争の中心 (あそこ-あなた)

展示の対象 (あなた-あそこ-戦争)

展示の対象 (あの人-あそこ-過去)

展示の対象 (あの人-あそこ-過去)

あの日
"おたしたち"から見た

The Institute for Peace Science
HIROSHIMA UNIVERSITY

記憶継承の取り組み (命・人権)

フランス、人間と市民の権利の宣言 (1789-91) (2003年登録)
フィリピンの人民の力革命のラジオ放送 (2003年)
カンボジア、ツール・スレーン虐殺博物館のアーカイブス (2009)
韓国光州民主化運動の記録 (2011) など。

しかし、2014年南九州市の知覧平和祈念資料館所蔵の「特攻隊員書簡」申請や、中・韓「慰安婦資料」申請など解釈視点の相違で波紋。論争激化も。

同じ戦争の経験が、視点の異なる人々によって違う語られ方をします。そのちがいが時には論争や紛争を生みます。そこで、戦争の記憶を平和的に継承していく国際的な取り組みがあります。その一つの例に、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の「世界記憶遺産」があります。これはもともと世界の貴重な歴史的な文書や絵画、音楽などを保存して、多くの人に伝え、共有することを目的としています。イギリスの記憶遺産である「マグナ・カルタ（大憲章）」とか、フランスの「人権宣言（人間と市民の権利の宣言）」、オランダの「アンネ・フ

けれども、「何を」記憶遺産として選択するかで論争も生まれました。例えば、南九州市が、知覧平和記念館所蔵の特攻隊員の書簡を平和のための世界記憶遺産として申請したことで、2013年から2014年にかけて、韓国や中国との大きな論争がありました。ですから、何をどう平和の記憶として継承するかによって、かえっていわゆる歴史解釈論争の火種になることにも、私たちは注意しなければなりません。ここでも、言説コミュニティ構築と「視点」の共有が要になります。

また、記憶継承には、ただ、貴重なものを集めて保存すればいいのでしょうか。そうで

はありません。志賀館長が先ほどおっしゃったように、伝えるためには適切な方策とそのための研究・教育が必要です。ですから、ヨーロッパでは今、「Horizon 2020」という教育研究プロジェクトの記憶遺産研究も展開しています。そのほか、自治体やボランティアによって、各地の戦争記憶を平和のために使う様々な取り組みがあります。そんな世界の努力に、私たちも原爆体験の継承をつないでいきたいものです。世界と言えば、今やデジタル世代となって、世界中で多重・多層的な情報の発信源が生まれました。あちこちから情報が出てきて、ニュースの量や発信源の予測がつかない。ありすぎたり、少なくすぎたり、内容もどれが真実か分からない混沌とした状態です。先日、読売新聞に「都合のいい情報が『真実』」、そんな時代が到来した、という報道がありました。朝日新聞でも、「偽ニュース 悩める欧州」とありました。実際、SNS で流れたニュースが本当にあったのか、なかったのか、真偽も分からない状況です。



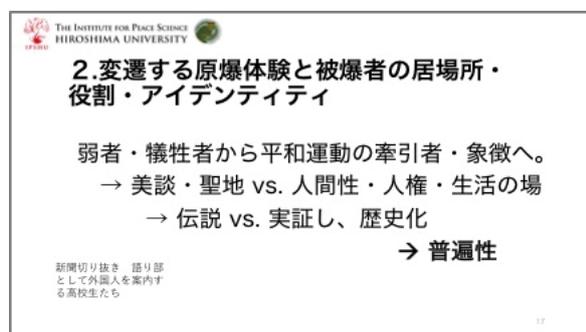
そんな中で、事実に基づいた原爆体験を継承していくためには注意深い情報の選択が必要です。何を選ぶか、信念や方針が必要です。体系的に、ポリシーに基づいて情報を取捨選択しなければなりません。その

ポリシーとなるのが「原爆体験」という思想です。

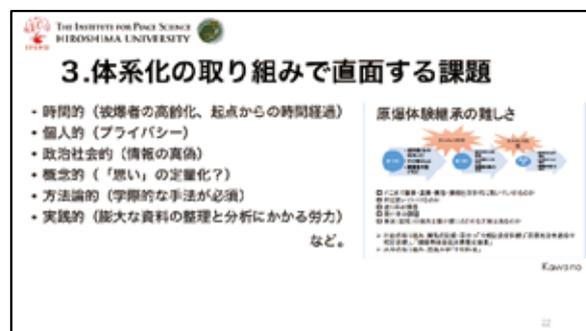
「原爆体験」とは、広島大学の石田忠先生が、原爆や被爆に関するいろいろな心のひだを「体験」という言葉で表現したものです。「被爆体験」という表現だけでは、「あの日」のことに限られてしまい、その後の人生経験や社会変化の歴史、被爆者の思いが置き去りにされると考えたからです。時を経て、変化があったことを示唆する思想体系です。また、原爆に関する研究で、人の命全体に関わる様々な側面を包括的に見る必要性を指摘するものです。身体的、経済的、精神的な体験が等しく重要な側面として、原爆体験の思想化に加えられました。大事なポイントは、原爆の災害を被って、受け身で終わったのではないこと。あの日から、被爆者の方たちと支える方たちが立ち上がり、自ら復興を担って新たな社会といのちをつくってこられたこと。それは、能動的 (active) な紛れもない現実の体験で、これも原爆体験の一つです。その上、広島・長崎という地域の枠を超えて、「人類」という大きな枠の中で、原爆体験から平和への思いを広げていったという普遍性がポイントです。

その軌跡の研究は、過去における原爆体験の参加型継承の例として、将来の私たちの平和活動に示唆を与えてくれます。例えば情報の真偽を確かめ、仮説を立て、条件がそろえば、同じこと、例えば、広島や長崎がみせたような復興が他の場所でも起こり得るかどうか考察できます。また、違う条件でも平和思想構築の可能性を考察できます。こうして、市民のみなさんの原爆体

験から、世界の各地での平和構築に役立つものが見えてくる可能性があります。それが原爆体験の普遍性を研究し、そこから得られたものを参加型継承に結びつけていくということです。



原爆体験の継承のコミュニティの一部として研究機関が情報収集・管理・提供・伝播の役目を担います。但し、このような大きなビジョンには、それ相応のチャレンジがあります。



例えば時間的な問題。被爆者の方々と被爆者を支えてきた方々はどんどん高齢化しています。それに、「あの日」から時間がたったので、記憶も薄れてきます。ホスキンス先生の言われたように忘却の問題があります。また、プライバシーの問題もあります。川野先生のご講義にもありましたように、差別問題もまだまだあるでしょう。結婚に関して被爆者は差別されるから自分の

娘にそんな思いはさせたくない、と長年被爆体験を隠してきた方々もあります。それも原爆体験の一つなのです。

もう一つ、「思い」をどうやって「体系化」するのかという研究上の技術的課題もあります。統計を使った報告を見た原爆体験者の中には、「私の気持ちを数字に矮小化してしまうのですか」という気持ちがあるかもしれません。確かに私も、自分の思いや愛情を誰かに数字で測られたら嫌です。それでも尚、情報社会で言葉や文化の壁を超えて意味を持つようにするため、数字にならないものをなんとか数字にし、言葉に置き換え、イメージを駆使して、いろいろな方法で原爆体験を伝えられるように、学際的な手法が必要です。多領域横断的な研究の技術と工夫が非常に重要です。このように、原爆体験を持つ側から情報を発信するための課題に加えて、原爆体験を持たない側が、情報を発信する際の大きな課題も見逃せません。例えば先ほど話したデジタル情報の真偽の問題です。現在は、「VUCAの時代」とよく言われます。OECD（経済協力開発機構）など国際機関でよく使う言葉です。移ろいやすい（volatile）、変わりやすい（changeable）、不確実（uncertain）、不安定（ambiguous）な時代という意味で、英語の頭文字をとって、VUCAの時代といえます。不安材料が多く、環境や政情・生活が不安定で、精神的にも疲れる時代です。その原因の一つとして、デジタル社会で情報は豊かになったけれど、情報操作も増えています。

そんな中で原爆投下の正当化も再浮上です。これはネット上に横行する1958年のト

ルーマン (Harry S. Truman) 談話に似た意見です。原爆体験が嘘だというようなネットの話し合いもあります。このスライドは、ネット上の記事からですが、有名なキノコ雲の上に「fake (偽物)」と書いています。平和記念資料館などで展示されているキノコ雲が偽りだというのは、しかし、記事をよくよく見ると、「fake」というジョッキングな見出しをつけておいて、実は『ニューヨークタイムズ』でほかの写真が見つかったと報道されたという内容でした。資料館の写真は偽物ではありません。この記事に対してネチズン (netizen)、つまりインターネットを使う人たちが、記事の投稿者を批判しています。「あなたは自分の投稿を読んでもらいたいがためにキノコ雲に『Fake』という見出しをつけたのでしょうか？あまりにも無責任ではありませんか」と同じサイトに投稿しています。

そのような読者の反応は、現在のネット上の原爆体験の継承において、ネット使用者らが「何をどう継承するべきか」という議論に自発的に参加している顕著な例です。原爆に関する情報を発信している人々の動機付けに注目し、原爆体験について誤認があったときにはその理由を調べ、情報を取捨選択することによって原爆体験の体系化、

続いて歴史化へと発展していく研究の意義を示唆しています。

原爆体験継承において「動機」は大きな影響力を持っています。動機は興味から生まれます。人は、自分に関連性が薄いと感じるものについては、興味がありません。継承もしないでしょう。「キノコ雲」の話を聞いても、そういうことがあったのか、でも嘘かもしれない、どうでもいい、となってしまう。ところが、こういう人たちがここに暮らしていた。例えば自分が好きな漫画の主人公、「すずさん」の「妹」の上に、この原爆が落ちた、その時のキノコ雲がこれだよ、と聞けば文脈を得て親近感が湧きます。そして、昔、アメリカはキノコ雲の写真を広島にくれなかった。やっと一つ、この写真だけ手に入ったんだ。だから、資料館でこれを展示してきたんだ。こちらの写真は最近になって見つかったものなんだよ、とこんな話を聞けば、事実関係がわかります。そうやって、様々な事実と事実の点を紡いでいくことによって事実の糸が絡み、「語り」のタペストリー (織物) を編み上げていきます。この事実と解釈の糸を紡ぐ作業が、言説をつくるということです。事実の点と点を繋いで、文脈に織り込んでいき、原爆体験の大きな絵を描き出すのです。その絵を共有していくのが記憶の継承です。フック先生のお話にあった沖縄の戦争も、視点と文脈の多重比較がなされています。日本と沖縄の関係、例えば沖縄にとって1952年が主権回復だったのか、1972年だったのかと、異なる視点をそれぞれ考察しながら沖縄の戦争の言説が構築され、記憶が継承されてきました。

では、次にどうやって言説を捉えるか、他領域横断的手法を簡単に説明しましょう。まず、各種文献、公文書、新聞などの報道、被爆者の証言、アンケート、インタビューなどからデータをとります。このようにデータには、公的・個人的など様々あります。テキストの内容、資料の出典、年月日、その他の情報を記録します。定量分析に使用する部分は数量化しながら同時に、社会・歴史的な文脈の面も考慮し包括的なデータベースを作ります。個人情報にはもちろん十分に配慮します。例えば、最近の思いの変化を調べます。これは読売新聞と朝日新聞の被爆者アンケート結果を分析したものです。その次に、1940年代以降、原爆投下前にさかのぼって、各文献資料に現れた原爆に関する言説をデータ化します。資料には、中国、毎日、読売、朝日、日本経済新聞などもありますね。沖縄タイムスなども。日本語で現れた言説を米英の大手英字新聞に現れた言説と比較します。国内外の公文書の記録も比較します。これらは、メディアや歴史的な文書に現れた原爆体験の継承のデータです。次に個人の継承も重要なデータです。被爆者の皆さんの手記や書簡に現れる言説のことです。例えば、被爆者のみなさんが、原爆体験について書いた走り書きで、「こんなのはただの紙切れのノートだよ」とおっしゃるものが重要です。また、語り部の皆さんの録音を書き起こしたものに現れる言説も重要です。将来的には言葉以外の表現や芸術的な表現も原爆体験のデータとして分析を考えています。

THE INSTITUTE FOR PEACE SCIENCE
HIROSHIMA UNIVERSITY

4. データと手法

- ・データ
 - ✓ 統計
 - ✓ 言語的
 - ✓ 社会歴史
 - ✓ 個人的考慮
- ・共同研究
 - ✓ 将来の参加型継承を促進し支援するデータ分析結果、資料の公開に向けて。

28

さて、データの全体像をみたところで言葉の数量化に戻りますが、「本当に思いを数字にできるのですか、という質問ですね。例えば、「私が広島に行く」「私は広島に行く」。日本語だと「は」と「が」の違いで意味が変わってきますが、音節の数や語数は同じです。これを統計でどうやって説明するのか。

THE INSTITUTE FOR PEACE SCIENCE
HIROSHIMA UNIVERSITY

統計的考慮～ことばの数量化？

1. 語 vs. 形態素&文脈

Watashi *wa* Hiroshima *ni* iku. (I will go to Hiroshima)
 Watashi *ga* Hiroshima *ni* iku. (I will go to Hiroshima - but not others)

→日本語は膠着語。文脈に頼る (context-dependent)

Watashi *wa* Hiroshima *ni* ik-as-are-ta. (I was made to go to Hiroshima.)

→意味は内容語だけでなく、機能語、語尾の変化でも表す。

28

また日本語は「膠着（こうちやく）語」といって、まるでジグソーパズルのような構造になっていますから、英語とは、意味の単位が違います。ですから、日本語は日本語の特徴を見ながら、英語は英語の特徴にあわせて数量化し比較できる手法を使います。分ち書き（形態素解析）を行い、品詞の特徴を鑑みて助動詞の活用型に現れた心のひだの表現を汲み取るなど、緻密な作業を行います。

こちらは先ほど川野先生が見せてくださった例です。次にこれはKWIC Concordance

というソフトウェアを使って「地獄」ということばの用例を解析したものです。これらは、言葉だけではなく、文脈が大事だということを表しています。どんな文脈で「被爆」が出ているか、もしくは「地獄」という言葉が出ているかを見ています。

統計的考慮～ことばの数量化?

2. どちらが重要?

私は広島を忘れることができません。
あの広島が忘れられない。

語数だけではテキストを分析できない。
語と語の位置関係、文脈 (context)
表記方法など重要。(音声：抑揚、高低、音量)。

広島・長崎の被爆証言の「地獄」の用例

Rawano

それだけではありません。ある言葉が特定の文脈で使われた頻度なども調べます。ただ、意味を考えると、「それ」や「これ」という表現が 100 回出たとしても、「それ」や「これ」が差しているものが何か分かりません。爆弾のこともかもしれない、あの時に焼けた瓦かもしれない、と。文脈から指示語の言葉の意味を調べ、当てはめてから数量化するという極めて細かい作業が必要です。

統計的考慮～ことばの数量化?

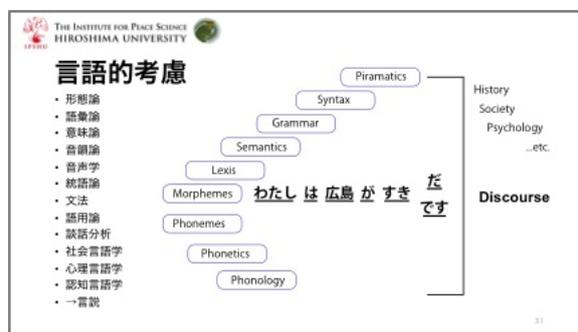
3. 頻度 vs. インパクト

- 代名詞
- 日本語の「ゼロ」表現の扱い
- 文面+付帯情報=理解
 - Text + Context = Comprehension

Cohesion vs. Coherence

ということで、詳細は割愛しますが、言葉を分析するにあたって、単位ごとの意味、文脈における使い方、与える印象など、言語・言説構造全てのレベルで詳しく分析し

ていきます。言葉は生き物だということを忘れず、常に状況設定や、話者の意図を考慮しながら。



もう一つ、言説分析で大変重要なのが「沈黙」や「割愛」です。例えば皆さんは、これをご存じでしょうか。

(英語の音声再生 約 1 分間)

これは原爆投下の 10 年後、オッペンハイマー (Julius Robert Oppenheimer) さんが、インタビューで、最初の核実験を見た時のことを回想したものです。日本語だとこんな感じでしょうか。

「私たちは世界が変わったのを悟りました。笑った者もいれば、泣いた者もいました。でも、ほとんどは黙ってしまいました。その時、心に浮かんだのは、ヒンズー教の聖典バガヴァッド・ギーターの一節。ヴィシュヌは王子が義務を果たすよう説得するため、千手の姿となって言った。『いまぞ、われは死となれり、世界の破壊者となれり』。多かれ少なかれ、私たち科学者たちは皆そうした思いを抱いたのだと思います。

ここで大事なのは、彼は広島や長崎、原爆、被爆や破壊という言葉は一度も使っていません。でも、それをこの人が悔やんでいることが、動画を見た私たちには分かります。つまり言説には「言わない選択」もあります。テキストの表面を数えるだけでは浮き出しにできない言説です。さらに、文化的情報も言説分析の重要な点です。彼がヒンズー教から引用した理由は何か、掘り下げればこの発言の背景が分かります。原爆投下から10年目で社会の状況も変化し、冷戦の最中でした。例えば、共産主義者への弾圧を避けるために口に出せなかったことなど、いろいろな文脈が考えられます。

また、彼は途中で、、、(会場：涙が)そう、涙をぬぐいましたね。それも言説を形作る側面の一つです。言説は生き物ですから、多様な側面を持っていて変化します。それを捉えるため最後に、過去の研究で構築してきた手法をここで少しだけご紹介して、報告を終わりたいと思います。

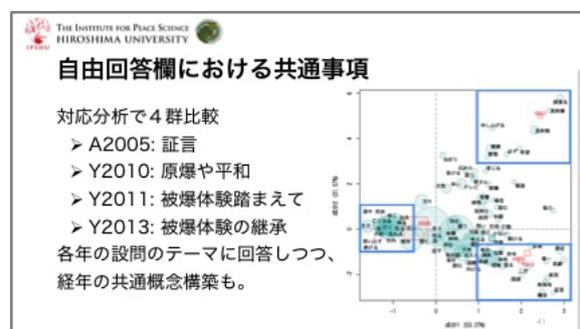
まず、これは、PM2.5という越境大気汚染についてのメディア言説研究です。



有害物質が中国から大気によって流れてくる。それにどう対処すれば良いか、責任の所在は誰か、など日本語で書かれた記事で2016年3月までに発行されたもの全てを

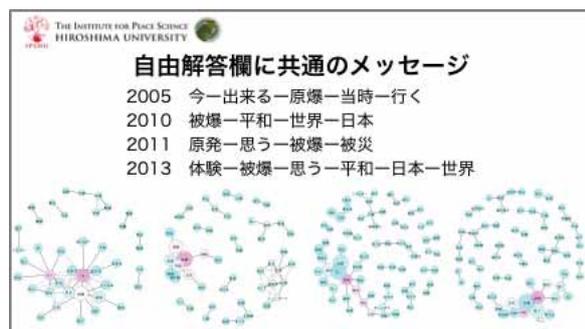
収集、データ化し、言説の構造と継時的変化を調べたものです。その結果、汚染物質を除去する責任の所在は、新聞の報道において国家から地方行政、地方行政から産業界、産業界から一般市民へと転嫁されていることがわかりました。さらに、その転嫁がおこった時点と歴史的な事象を照合し、相互的な関係と時間的一致を実証することができました。このような手法を使えば、「思い」や「考え」の変遷を実証することも不可能ではありません。

次に、原爆体験の言説を共有されているかどうか、を調べた研究の例を紹介しましょう。被爆者を対象にした朝日新聞の2005年アンケート調査と、読売新聞の2010年、2011年、2013年調査の自由回答欄のテキストを分析しました。それぞれの年の設問テーマに回答しますが、2005年から2013年の大きな時間枠で見ると、一貫性をもって継時的に変化する共通のメッセージが見出せます。対応分析の結果です。次に共起分析では、アンケート回答で被爆者の方々が頻繁に用いた言葉の全体像を調べ、被爆者の原爆体験における共通のメッセージをこのように視覚的に表しました。



例えば2005年では、「原爆当時を思い出す」と同時に、「今できること」を「これか

らもやっていく」という思いが伝わってきます。2010年では、「被爆」の経験から「世界」と「日本」の「平和」を求めています。2011年では、「原発」事故で「思う」のは「被爆」と「被災」の事だというメッセージです。2013年では、自分の「被爆」の「体験」から「思う」ことは、「日本」と「世界」の「平和」だと訴えています。このように、被爆者の平和への思いが少しずつですが変化しています。自己体験と普遍的な平和が年月を経てさらに重なりを見せています。アンケートの自由回答では、思うことを適当に書いて良いのです。それなのになぜか、被爆者全体からこのように共通のメッセージが出てきていること、しかも、経年変化があるのがわかりますね。



このように、いろいろな手法を選び取り、組み合わせながら、言説にみられる「思い」や「メッセージ」のパターンを浮き彫りにしてきました。でも、これだけでは十分ではありません。次に文脈を当てはめてさらに分析します。例えば、時事問題と原爆体験の言説の関係を分析し、時を経て社会変化とともに、原爆体験の表現が変わっていく様子を指摘し、その理由を考察し、説明していきます (Kawamoto, van der Does, Kawano 2016)。今後、さらに 原爆体験の

「からだ・くらし・こころ」にまつわる事象や社会の変遷とそれを表す言説の変遷との相互的關係を明らかにしていきます。「あの日」の一人、一人の苦痛と「からだ・くらし・こころ」の悲惨な破壊の経験が、どんなあゆみを経て、復興を担い、いつか個々の原爆体験の思いや視点が広く共有され、普遍・恒久の平和を希求する集合的な力を生み出していったのか、その言説のあゆみを明らかにします。そのあゆみが「私に関わること」として、広くみなさんにも原爆体験の情報・知識・言説の視点を共有していただけるように、今後も成果を提供していきたいと思います。そのためにも、被爆者のみなさんと支えるみなさんのご活動、資料館の豊かな資料と幅広い活動、メディアのダイナミックな報道に私たちの研究成果との関わりについて次の機会に成果をご報告したいと思います。



最後になりましたが、原爆体験の参加型継承のビジョンで一番大切なのは、やはり皆様のご協力です。原爆体験に関する新たな情報や、必要な情報などございましたら、私どもまでいつでもご連絡ください。今後ともどうぞよろしくお願いたします。皆様、ご参加大変ありがとうございました。